

「六師外道」の人間観

九州龍谷短期大学  
原田泰教

仏教興起時代には、従来の伝統的なバラモン教思想から展開し、ウパニシャッドの思想、六十二見と呼ばれる思想と並んで、非バラモンの系統に属する「六師外道」という自由思想家たちが活躍していたことはよく知られている。釈尊もそのような時代背景の中で登場している。六十二見が過去世や未来世についての見解を理論上の分類によって数え上げているのに対し、「六師外道」は実際の思想家が明示的に示されている。すなわち、プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴーサーラ、アジタ・ケーサカンバラ、パクダ・カッチャーヤナ、ニガンタ・ナータプッタ、サンジャヤ・ヴェーラッティプッタである。彼らは仏教の「内道」に対して「外道」と呼ばれたが、決して荒唐無稽な説を唱えていたわけではない。懐疑論や運命論など、それぞれが釈尊の思想とは異なる立場の説を述べていたのである。しかし、釈尊の思想と全く無縁であったわけではない。

「六師外道」について詳しく述べられる文献の代表は、パーリ語經典である『沙門果經』である。この經典では、アジャータサットゥ王が釈尊との対話という形を通して「六師外道」の教説を語る物語となっており、六師それぞれの人間観が述べられる。これらの人間観は、釈尊の人間観と相通じるものがある。例えば、世界を構成するものとして、アジタ・ケーサカンバラの四大元素説（地・水・火・風）、パクダ・カッチャーヤナの七要素説（地・水・火・風・苦・楽・靈魂）は釈尊の世界観と相通じるものがあり、また、ジャイナ教の開祖となるニガンタ・ナータプッタの相對論や五戒の実践は、仏教思想と類似している。結果として、「外道」として区別される思想でありながら、釈尊の思想形成に「六師外道」が大きな影響を及ぼしたことは否めない。

「六師外道」に関する研究は、従来より多くの研究者によって進められてきた。『沙門果經』に関する現代語訳も幾種も存在し、研究を進める上での環境は十分に整っていると言っているのではないかと考えられる。『沙門果經』のパーリ語原典はもとより、可能な限り漢訳仏典も参照し、言語の違いによる思想的広がりも検討したいと考えている。

本発表では、従来の「六師外道」の解釈に大きな変化を与えるものではないが、『沙門果經』を通して「六師外道」の世界観、人間観を、仏教と全く異なる説として排除することなく、釈尊の思想に近接するものとして再確認し、仏教の教説にどのようにつながっていたかを確認し、当時の思想界の状況を再提示したい。

<キーワード>

仏教興起時代、六師外道、『沙門果經』